

花豆「常陸大黒」の産地育成

常陸大宮地域では、農業従事者の高齢化が進んでおり、遊休農地も年々増えています。そこで普及センターでは、軽作業であるため高齢者でも無理なく栽培できるベニバナインゲンの新品種『常陸大黒』を県北中山間地域の新たな特産品として育てていこうと、生産者と共に試行錯誤を繰り返しながら産地化に向けて取り組んできました。

● 新たな産地の育成 ●

平成 18 年に生産者 20 名で常陸大黒栽培研究会が設立され、翌年には JA 茨城みどり露地園芸部会内の組織として位置付けられました。組織化に伴い、生産者・栽培面積も年々増加し、平成 20 年には常陸大宮管内で生産者が 51 名、栽培面積も 170a まで拡大し、特産品開発による地域の活性化と遊休農地解消に期待されています。



栽培講習会の様子



農村女性大学での加工実習

● 花豆の加工品開発と PR 活動 ●

県内でも冷涼地域でしか栽培できないという特殊性から、県北地域の新たな特産品として、消費者から注目を集めています。豆の加工を菓子業者だけに任せるのではなく、農村女性大学講座や地元加工グループの品評会等で、生産者自らが新たな試作品の開発に取り組み、常陸大黒の知名度向上に向けて活動しています。

● 花豆栽培技術の確立 ●

安定した栽培技術の確立に向け、は種時期が収量・品質に及ぼす影響について調査し、最適な栽培時期を確立しました。また、常陸大黒は登録農薬が少なく、病虫害（特に土壌病害）が発生した場合使用できる農薬が限られています。そこで、栽培講習会や現地巡回をとおして、高畝や明渠を徹底し排水性を高めるよう指導したことで、茎根腐病や綿腐病の被害が軽減され、平成 18 年の平均収量 140kg/10a から平成 20 年には 200kg/10a 以上の収量を達成しました。



現地巡回の様子